
事務局スタッフとして参加して

井門 直美：「沖縄の歴史情報研究」事務局

私は、事務局のスタッフとして約2年半、勤めさせていただきました。途中から参加したため、初めはプロジェクトの全体像もよく呑み込めないまま、ただひたすら書誌情報を入力し続ける日々でした。正直なところ私は、沖縄の歴史どころか人名の読みや地名すらまとも知らず、データ入力の際には森さん(スタッフの中では唯一の沖縄出身者です!)に何度尋ねたことか…。古文書の目録を入力する際などは、漢字ばかりが長々と並ぶ表題に慣れるまで辞書登録もままならず、四苦八苦したものです。琉球、歴史、古文書、漢字、外字(?)!…、いずれのキーワードから検索しても「蓄積0件」だった私が、最終年度には「外字処理担当」ということになってしまいました。門外漢の私にとって、最後の1年間は殊更に長く、外字の夢にうなされたことまでありました。この作業は、今までにスタッフ全員が入力してきたデータ中の外字を、全て洗い直して作成した原簿をもとに、「大漢和辞典」「漢字典」「漢字異体字典」等の一つ一つ再確認するところから始めました。最終的には、「赤嶺コード」に含まれていない外字を赤嶺先生にご検討いただき、コード化されたものから順次処理をして、文献ファイルを仕上げていくといった流れで進めて参りました。3月の期限までに間に合うかどうかと一時は気を揉みましたが、何とか無事終了することができ、ほっとしています。自己評価とえば、何より勉強不足が悔まれますが、ただ、図書館司書時代に目録規則の転換期を迎えて苦労したことが、様々な年代に作成された文献目録を入力する際に、少しは役立ったかも知れません。

私が「情報処理」という言葉に漠然と魅かれ、同時に「プライバシー保護」と「知る権利」ということに興味を感じるようになったのは、約20年前のことでした。ようやく大型計算機が普及し始めた時期だったのではないのでしょうか。私は、自分の専攻分野を生かすことができ、しかもこの三つの魅力的な言葉に最も近い職業の一つとして、図書館司書を選びました。当時、「プログラミング」や「情報検索法」「図書館機械化論」等コンピュータ関係の講義は、かなりの人気があったように記憶しています。勉強の傍ら、少し実務経験もと考えてアルバイトに行ったのが、国会図書館の逐次刊行物部でした。ちょうど機械化への前段階が始まったところで、国内外から送られて来る膨大な刊行物の目録情報を全て入力するための準備作業でした。最近では、コンピュータによる情報検索は多くの分野で当たり前になりつつありますが、あの頃、とくに日本語文献のデータベースにはどんなに大きな期待が寄せられていたことでしょうか。

このプロジェクトのことを知った時、私は「あっ、まだ未開拓の分野があった!」と驚き、こうしたフロンティア精神に満ち満ちた企画の中で作業できることに、何か運命的なものさえ感じました。古文書のことはよくわかりませんが、この企画が、近い将来日本の歴史について世界中の誰でも自由に研究できるようなシステム確立への突破口となるならば、これは途轍もなく凄いことの始まりなのでは、と私なりに夢をふくらませています。何やら新しい世界を切り開いていく局面に立ち合っているような、わくわくする仕事でした。

そして、岩崎先生の何事にも前向きな熱意あふれるお姿を目の当たりにでき、本当に多くの事を学ばせていただきました。先生には、ご多忙なスケジュールにも関わらず木目細やかなご指示をいただき大変お世話になりましたこと、深く深く御礼申し上げます。